

# 外 部 評 価 報 告 書

大 分 大 学

教育福祉科学部・大学院教育学研究科

## はじめに

教員養成系の大学・学部を取り巻く情勢は、教員養成機能の一層の充実，深刻な教育課題への対応等，厳しいものがあります。こうしたなか，各大学・学部は，時代の要請にこたえるべく，改革をすすめ，充実を図ってきました。本学部においても，平成9年度及び平成11年度と大幅な組織改革を行いました。とりわけ，平成11年度は，これまでに増す大規模な改組を行い，学部の理念や目標を大きく変えて，学部名称も教育学部から「教育福祉科学部」としました。

一方で，その後の大学を取り巻く状況は，教員免許状に必須となる「教職実践演習」の新設，教職大学院構想の拡充等，さらに大きく変化しつつあります。各大学・学部には，実践する力量のある人材を世に送り出すため，これまで以上に教育・研究への精力的な取り組みが求められています。

こうした流れのなかで，今回の外部評価は，学部及び大学院教育学研究科の理念や目標の実現のための取組について，その実効性を第三者の立場から客観的な点検を行っていただくために実施したものです。評価は，平成16年～21年度の教育活動，学生生活支援，社会との連携の3項目を対象としています。

この外部評価のために，野中信孝先生（大分県教育委員会教育長），松畑熙一先生（中国学園大学長），兒玉修先生（宮崎大学教育文化学部長），古屋虔郎先生（大分大学教育福祉科学部同窓会長）に委員をお願いいたしました。先生方には，ご多用のところ快く委員をお引き受けくださり，本学部のために貴重なご意見，ご提言をいただきました。学部を代表いたしまして心より御礼申し上げます。今後，この外部評価結果を踏まえ，学部の一層の発展に取り組んでいく所存です。

大分大学教育福祉科学部長

柳井智彦

## 目 次

学部評価委員会委員-----	1
大分大学教育福祉科学部役職者-----	2
大分大学教育福祉科学部外部評価要領-----	3
講評・評価-----	4
外部評価委員会記録-----	1 6

## 外 部 評 価 委 員

役 職	氏 名
大分県教育委員会教育長	野 中 信 孝
中国学園大学長	松 畑 熙 一
宮崎宮崎大学教育文化学部長	兒 玉 修
大分大学教育福祉科学部同窓会（豊友会）会長	古 屋 虔 郎

（敬称略）

平成 24 年度教育福祉科学部役職者名簿

役 職	氏 名
学 部 長	柳 井 智 彦
副 学 部 長	藤 井 弘 也
副 学 部 長	馬 場 清
評 議 員	平 田 利 文
評 議 員	山 下 茂
副 学 部 長 教 務 委 員 長	堀 泰 樹
学生生活委員長	石 橋 健 司
教育実習委員長	伊 藤 安 浩
就職・進路委員長	吉 岡 義 正
入 試 委 員 長	望 月 聡
教育研究所長	稲 用 茂 夫
附属教育実践総合 セ ン タ ー 長	黒 川 勲
事 務 長	永 松 一 生

## 大分大学教育福祉科学部外部評価要領

### 1 評価委員（敬称略）

- 野中 信孝（大分県教育委員会教育長）  
松畑 熙一（中国学園大学長）  
兒玉 修（宮崎大学教育文化学部長）  
古屋 虔郎（大分大学教育福祉科学部同窓会長）

### 2 評価いただく項目

- （学部） 教育活動， 学生生活支援  
（大学院） 教育活動， 学生生活支援  
（全体を通して） 社会との連携

### 3 評価の方法

各評価項目について， 評価用紙にご記入をお願いします。

### 4 評価期間

平成24年5月10日（木）までに， 評価用紙のご返送をお願いします。5月下旬に評価のまとめとして， 委員の皆様にお集まりいただき， 協議をお願いする予定にしております

### 5 評価資料

「大分大学教育福祉科学部の現状と課題—自己点検・自己評価報告書—  
平成16年度(2004年度)—平成21年度(2009年度)」

### 6 参考資料

- ・ 教育福祉科学部・大学院教育学研究科概要
  - ①平成16年度分
  - ②平成21年度分
- ・ 履修の手引（学部）
  - ③平成16年入学生用
  - ④平成21年入学生用
- ・ 履修の手引（大学院）
  - ⑤平成16年入学生用
  - ⑥平成21年入学生用
- ・ 学生生活案内
  - ⑦平成16年度分
  - ⑧平成21年度分
- ⑨ 教育実習・介護体験の手引き 平成21年度入学生用
- ⑩ 大分大学学生生活実態調査2009年度版（平成21年度）

他にご入用の参考資料がございましたら， 総務係までご連絡をお願いします。

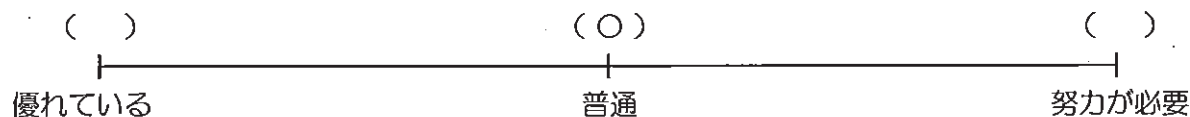
なお， 前回の自己点検評価報告書「大分大学教育学部・教育福祉科学部の現状と課題平成15年（2003）」につきましては， 外部評価報告書とともに， 大分大学のホームページ（学部大学院→教育福祉科学部・教育学研究科→学部概要→資料印刷物）に掲載されております。

# 評 価 書

## 1. 学部

### ①教育活動

【総合評価】



※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内に○を記入してください。

【ご意見等】

○平成21年4月の教育職員免許法施行規則の改正等に伴い、カリキュラム改革を実施、教員養成コア科目の新設必修化と教育実習の充実を目指すことで学部の教員養成機能の強化が図られた。この内容は、多様な教育体験と学部授業を有機的に関係づけ、教育実習の強化を図るなど、昨今の教育課題をふまえたものであり、評価できる。ただ、新カリキュラムの実施は始まったばかりであり、今後、実効性を高めるための実施体制の充実が必要である。今後の推移を見守りたい。

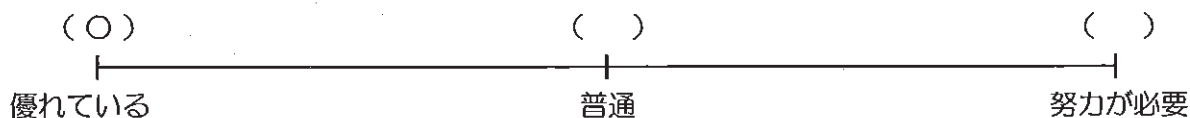
○学期末の成績だけでなく日常的な学習状況・課題やレポート・小テストなどを加味して総合的に行う成績評価と成績指標制度（GPA）は、教育の質の向上に成果をもたらすものであり、評価できる。

○「オープンキャンパス」や「キャンパス大使」、高校に出向く「出前講義」や「進学説明会」など、高校生に対する大学の充実した情報提供が行われており、評価できる。

■学部学生の留学者数が少ない。グローバル人材の育成が求められる中、教員を目指す学生には、もっと積極的に海外で学び視野を広げてほしいと願う。

### ②学生生活支援

【総合評価】



※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内に○を記入してください。

【ご意見等】

○就職支援体制について、教員採用試験対策講座を実施、平成21年度から、その回数増加や内容の充実を行うとともに、個別指導を充実させ、教員養成課程の教員志望率が向上、平成21年4月採用教員就職率が全国8位と成果を上げている。また、福祉関連国家試験対策講座も実施、21年度実施の社会福祉国家試験では現役合格率84.6%（受験者10名以上の大学で全国5位）と高い成果を上げており、評価できる。

# 評 価 書

## 2. 大学院

### ①教育活動

【総合評価】



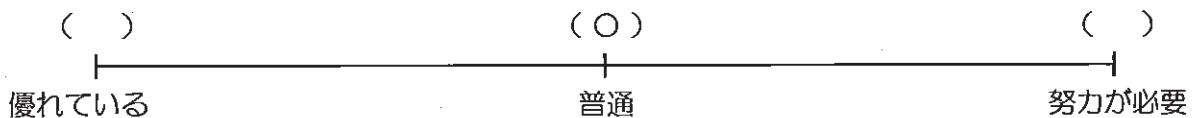
※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内に○を記入してください。

【ご意見等】

○10教育専修が構成され、大学院での研究体制が整っている。  
○教授及び准教授の補充率は80%を超えており、「教育研究の高度化と統合化への対応」の取組基盤である人的体制が充実しつつある。  
■教育体制及び研究体制の改革の基盤となるカリキュラムの充実など実質的な教育研究活動体制を強化する取組が求められる。

### ②学生生活支援

【総合評価】



※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内に○を記入してください。

【ご意見等】

○教育・研究施設の改修が平成21年度に完了するとともに、設備・備品等の更新が行われ、教育・研究の体制が充実してきた。  
○情報提供が携帯端末からも行え、常時適切な情報提供ができ、緊急時の危機管理体制も強化された。  
■交流協定を活用した海外留学制度を充実してきたが、支援制度が不十分であり、派遣実績が向上していない。



# 評 価 書

## 3. 社会との連携

【総合評価】



※総合評価はあてはまる段階の( )内に○を記入してください。

【ご意見等】

○学識経験者として、教員が県主催の委員会等の各種委員、各種研修会の講師を積極的に務めている。また、大学・大学院における現職教員・社会人の受け入れ、高校からの要請による出前講義、高校生対象の公開講座、高校生向けしチャレンジ講座（遠隔配信）等の実施、さらには、フレンドシップ事業やまなびんぐサポートなど地域や学校の活性化につながる事業の実施など、地域への貢献の度合いは高く、評価できる。

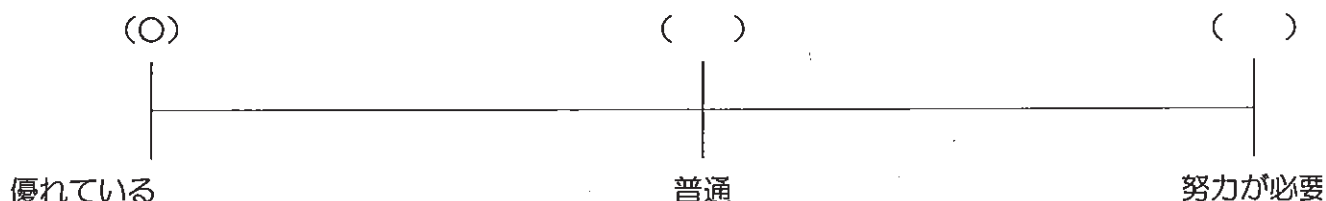
お名前 野中 信孝

# 評 価 書

## 1. 学部

### ①教育活動

【総合評価】



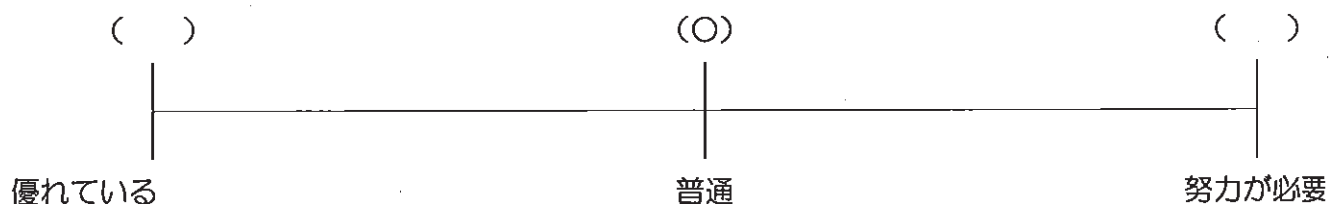
※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内に○を記入してください。

【ご意見等】

1. 各課程毎に課題分析と達成状況が点検評価され、課題認識が明確化されていて良い。
2. 「学部改善アンケート」の実施に基づいて、学生のニーズに合った改善の具体化が望まれる。
3. 教員一人ひとりの全員参加による適正な自己点検・評価の集積と、全学部的観点からの全体評価とが総合化されることが望ましい。
4. 学部の教育理念・目標をどのように教育活動などに具現化していくかの体系的でしかも実践的な検討と改善がさらに進められることが期待される。
5. 教員養成コア科目の新設必修化と教育実習の充実などを通して、教員に求められる資質能力の向上に成果をあげつつある。
6. 入試を「選抜」から「教育」のパラダイムに重心移行して、高大接続教育のための入試のあり方を検討して進めてほしい。

### ②学生生活支援

【総合評価】



※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内に○を記入してください。

【ご意見等】

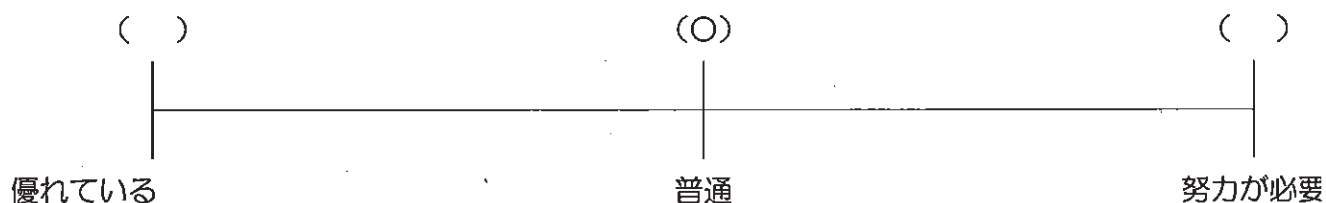
1. 学生のモラル・マナーの向上に努力されていて良いが、「さわやかな挨拶」も含めた社会人基礎力をさらに培う努力をしてほしい。
2. 入学の入口から卒業の出口までの継続的なキャリア教育の体系化とカリキュラム化が望まれる。
3. まなびんぐサポート」や「地域健康キャラバン」などが精力的になされていて良い。
4. 学生ボランティアの管理と運用の整備が望まれる。

# 評 価 書

## 2. 大学院

### ①教育活動

【総合評価】



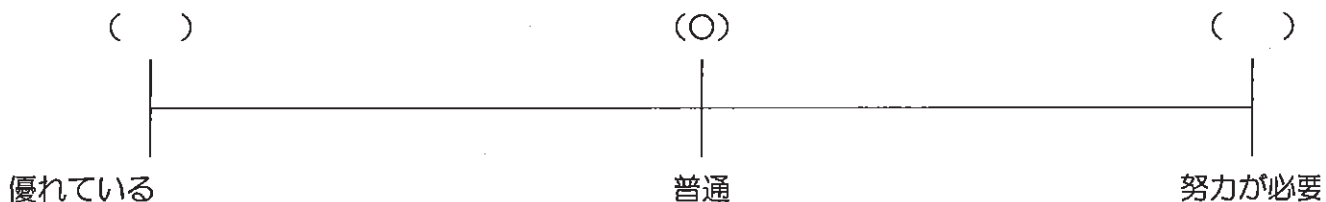
※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内にOを記入してください。

【ご意見等】

1. 「高い研究能力」と「豊かな実践力」との相関関係と、どのように両立させてゆくかを明確にすることが望まれる。
2. 人事計画・人的体制の充実による教育・研究の質の向上が期待される。
3. 「教育実践力」を高めるための教育・研究の全体的検討と、教員一人ひとりの教育・研究における実践的向上をさらに追究してほしい。

### ②学生生活支援

【総合評価】



※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内にOを記入してください。

【ご意見等】

1. キャンパス環境や施設の整備はかなり進んでいるようで良いが、生活面の支援の充実が望まれる。
2. 研究環境を向上させる意味から、奨学金制度等の検討を進めてほしい。
3. 就職支援体制は良好であると考えられる。

# 評 価 書

## 3. 社会との連携

【総合評価】

(○)	( )	( )
優れている	普通	努力が必要

※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内に○を記入してください。

### 【ご意見等】

1. 「地域貢献」の定義と具体的内容を明確にするよう努力してほしい。
2. 「まなびんぐサポート」や「地域健康キャラバン」などが精力的になさっていて良い。
3. 学生ボランティアの管理と運用の整備が望まれる。

お名前 松畑 熙一

## 評 価 書

### 1. 学部

#### ①教育活動

##### 【総合評価】



※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内に○を記入してください。

##### 【ご意見等】

- カリキュラム改革によってコア科目・教育実習・体験学習科目との体系化を図ろうとしている。
- 学校教育課程では科目の精選が、人間社会福祉課程では資格取得を見据えた特色あるカリキュラムが編成されている。
- GPAによる成績評価の導入が積極的に行われ、一定の成果をあげている。
- 推薦入試合格者への「入学前課題」の提示や、入学者の追跡調査により入試問題の課題発見に努めている。
- 3種の全く異なる教育実習を円滑に遂行し、水準の向上に努めている。

カリキュラム改革の結果についてはまだ評価以前の段階だが、「教職実践演習」が実施されるまでには、評価の枠組みを提示しておく必要があるのではないか。

3課程の多様なカリキュラムを少ない教員数で運営するには大きな困難が伴うとはいえ、情報社会文化課程における教育課程上の諸課題と成果との差が気になる。

FD活動を通して、各課程の授業の在り方にどのような特徴的な問題が明らかになってきたかを明示していく必要があるのではないか。

#### ②学生支援

##### 【総合評価】



※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内に○を記入してください。

##### 【ご意見等】

- 教員就職率の向上、及び、社会福祉士国家試験・精神保健福祉士国家試験の合格率の高さは注目に値する。
- 悪質な交通違反者が少ないことや健康診断受診率の高さは日常的な広報活動の成果であろう。

就学支援等において学部独自の取組は残念ながら見られない。例えば、全学的な取組としての「学生と教員との意見交換会」は学部レベルで実施されてもよいのではないか。

「福祉のこころ」を謳う学部であれば、学生の相談体制の強化やハラスメント等の窓口体制の拡充はもっとはやく着手されるべきではないか。

## 評 価 書

### 2. 大学院

#### ①教育活動

##### 【総合評価】

( )

( )

(○)

優れている

普通

努力が必要

※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内に○を記入してください。

##### 【ご意見等】

○全国的に教育学研究科の入学定員確保が困難な折、定員確保のために入試広報体制の充実を図っている。

○社会人の受け入れに努めようとしている。

○研究科への多様なニーズをカリキュラムに生かそうと努めている。

教育学研究科のもともとの性格にもよるが、大学院で育成されるべき「専門性」や「高度な能力」があらためて問われているなか、基本的には教育研究体制に大きな変化はないとみなさざるを得ない。

入学定員の確保には、履修形態の工夫をはじめ、教育委員会との連携（大学院で学んでいる院生の実力についての説明、それに対する教育委員会の評価）、修了した現職教員との大学院での研究教育に関する公開懇談会の開催等々があるのではないかと。もちろん、学部教育との連動も必要ではあるが、それは単にカリキュラムレベルのことではなく、学部生に大学院授業を模擬体験させるといった具体的な行動レベルでも捉えるべきではないかと。

#### ②学生支援

##### 【総合評価】

( )

( )

(○)

優れている

普通

努力が必要

※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内に○を記入してください。

##### 【ご意見等】

○内外装の改修、施設の再配置、院生用の部屋の確保等、学習環境の整備に努めている。

○修了生の教員就職率の向上に努めている。

厳しい学部や研究科の施設環境のなか、院生の学習環境の整備を達成しつつある状況については高く評価したい。（「総合評価」は「普通」に近いほうの「努力が必要」です。）

教員就職率の向上は、入学者確保の条件にもなると考えられる。

ただ、「教育学研究科の課題」として指摘されている点についてほとんど進捗が見られない理由が「本研究科独自の委員会等の取組主体が存在していない」ことにあるのなら、研究科の運営組織自体を根本的に見直す必要があるのではないかと。

## 評価書

### 3. 社会との連携

#### 【総合評価】

(○) ( ) ( )

優れている 普通 努力が必要

※総合評価はあてはまる段階の( )内に○を記入してください。

#### 【ご意見等】

○「まなびんぐサポート」、「教育臨床フォーラム」、「地域健康キャラバン」、「情報イノベータ育成事業」等々のさまざまな活動のほか、学部ホームページや学部・研究科概要を通じた広報活動、出前講義・公開講座・公開授業の実施、教育実践総合センターを通じた企画の運営、フレンドシップ事業、心理相談室での対応実績等、学内外のさまざまな組織とタイアップした形での連携活動を積極的に推進している。また、その効果についても検証しようと努めている。

社会との連携を図り続けるためには、それを企画運営する組織自体が相互に連携し合うことが求められる。「社会との連携」でひとくくりにすることにあまり意味はないと思うが、地域社会との連携を図る諸活動をどのように組織的に統一するか（諸活動の成果をどのように評価するか）ということは検討されるべきであろう。

お名前 児玉 修

# 評 価 書

## 1. 学部

### ①教育活動

#### 【総合評価】

( 〇 ) ( ) ( )  
優れている 普通 努力が必要

※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内に〇を記入してください。

#### 【ご意見等】

- 1、理念、目標が時代と共に変わって行く（P29）は普遍の真理探求ではないのか
- 2、「今後の教員養成、免許制度のあり方について」（P30）の中教審答申に沿って教職実践演習が必修化され、到達目標と評価基準を明示している
  - ◎ 学部のこのすばらしい実践的な取り組みに対して、具体的成果を表示して欲しい
  - ◎ 無免許市民校長の採用に対する学部の見解を明確に表明すべきではないか（4年間の教員養成事業の否定ではないか）
  - ◎ 「とりわけ大分県教育委員会や大分市教育委員会と連携協働することで地域の教育課題にも対応できるカリキュラムに仕上がっている」としているが連携協働の内容を具体的に記録発表することが望ましい（P31）
- 3、学校教育課題として「学生から見た問題点、教員から見た問題点」の解決が望ましい

### ②学生生活支援

#### 【総合評価】

( ) ( 〇 ) ( )  
優れている 普通 努力が必要

※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内に〇を記入してください。

#### 【ご意見等】

- 1、就学支援で①自動車モラルマナーの向上指導 ②健康受診率の向上の参加率向上
  - ◎ 学生の声を聞く制度を整備し、学生と教員の意見交換会は必要に応じて開催すべきだと思う。（その内容の記録、検討、対応についてのまとめ）
  - ◎ 心理的要因で就学困難な学生、さらに経済的問題の解決状況は、特に留学生は円高対応で困窮しているのではないか
- 2、教職支援（P49～50）①5課題の具体的推進、説明 ②企業、医療福祉の就職率は全国8位（他大学に福祉部はあるのか） ③教員採用のH15～21年度（2.2.2①）の現役採用は29/307（小）11/234（中）H15小1、中0現役とは言え、教育力向上、資質教育の成果が問われる。
  - ◎ 県下全高校から優秀学生を本学部集中させる努力を関係団体と共に協力努力すべきではないか



## 評 価 書

### 2. 大学院

#### ①教育活動

##### 【総合評価】

( ) (○) ( )  
優れている 普通 努力が必要

※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内に○を記入してください。

##### 【ご意見等】

1、 教育理念、目標とも格調が高く(P60)2年間に亘り学校教育現場での教育の理論や実践の研究能力や専門性を高める教育に取り組んでいることを評価する。しかし次の点について説明が欲しい。

- ① 指導者（教授）は一般学部とどう異なるのか
- ② 一般教員採用条件はどうなっているのか
- ③ 現場教職員、一般社会人（無免許校長を含む）の受験入学対応
- ④ 文科省の設定目的と対応（制度性の問題、課題、予算措置、体制作り）
- ⑤ 学校教育専攻と教科教育専攻の違い
- ⑥ 処遇に対する考え方

#### ②学生生活支援

##### 【総合評価】

( ) (○) ( )  
優れている 普通 努力が必要

※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内に○を記入してください。

##### 【ご意見等】

1、 就学支援は①キャンパス環境や研究、教育施設の整備 ②情報提供方法の改善工夫 ③海外留学の取り組み等着々と推進されつつある。そうした中で次の点について説明が欲しい

- ① 学生の希望意見聴取の制度は必要ないか（教育、研究、生活、全般）
- ② 奨学制度の検討
- ③ 大学院生の定数はどうなっているのか（広報活動の内容、方法、範囲）

#### 2、教職支援活動

- ① 資格は特別な条件が与えられるのか
- ② 大学院独自の就職支援体制づくりの展望はあるのか（研究機関、行政機関、指導機関等）

## 評 価 書

### 3. 社会との連携

【総合評価】

(○) ( ) ( )  
優れている 普通 努力が必要

※総合評価はあてはまる段階の ( ) 内に○を記入してください。

【ご意見等】

- 1、福祉関連国家試験合格率(2. 2. 2②)就職率が高いのは努力成果。
- 2、 附属4校園と大学、さらに公立学校との連携、研究成果の還元と活用の体制、附属4校園の研究体制等の問題、課題解決の取り組み
- 3、 地域貢献と予算計画等、学部運営上、県、地教委との連携強化のため、県下唯一の国立大学法人として「協議会」等計画できないか
- 4、 広報活動
  - ① 学部ホームページ、学部概要のすばらしい内容が高校、同窓会等でどのように扱われているのか、県下の優秀高校生を本学部に集中させる組織的取り組みの計画が欲しい
  - ② 新聞、テレビ、チラシ等最大限利用計画は考えられないか
- 5、 H16国立大学法人化によるメリット、デメリットを具体的に公表して欲しい
- 6、 高等教育予算はOECD内で最下位。しかし、毎年1%づつの予算減額が行われている。国立大学法人(88校?)で政府に意見具申できないか
- 7、 学校教育教科の決定と大学の教科研究の関わり合いはあるのか(英語、柔・剣道等、指導者養成が先、政府の思いつきか)
- 8、 受託研究費、共同研究費、寄付金の拡大取り組みの組織はどうなっているのか
- 9、 紀要論文数の低迷、附属幼小教員希望者の減少等、研究意欲の低迷の原因等の分析は?
- 10、 教員免許単位制と研究意欲、免許制度と専門性等現場実態と研究機関教育行政の全体的論議が必要ではなかろうか

お名前 古屋虔郎

## 大分大学教育福祉科学部外部評価委員会

※ (以下の記録は平成24年5月31日に開催された外部評価委員会における協議を文字化したものです。評価委員は評価書の記述・項目に言及しながら発言をされています。)

### 大分県教育委員会教育長 野中信孝氏

県教育長の野中です。作年の10月に教育長を拝命いたしました。気が付いた範囲ということで評価書に基づいてお話をいたします。

1, 学部, ①教育活動です。ご意見等に記載しております。評価をしているところを白○で書いております。

○平成21年4月の教育職員免許法施行規則の改正等に伴い、カリキュラム改革を実施し始めています。教員養成コア科目の新設必修化と教育実習の充実を目指すということで、学部の教員養成機能の強化が図られた。この内容は、多様な教育体験と学部授業を有機的に関係づけ、教育実習の強化を図るなど、昨今の教育課題をふまえたものであり、評価できる。ただ、新カリキュラムの実施は始まったばかりであり、今後、実効性を高めるための実施体制の充実が必要である。今後の推移を見守りたい。

2つ目が成績の評価等の分野です。

○学期末の成績だけでなく日常的な学習状況・課題やレポート・小テストなどを加味して総合的に行う成績評価と成績指標制度(GPA)は、教育の質の向上に成果をもたらすものであり、評価できる。

3つ目です。

○「オープンキャンパス」や「キャンパス大使」、高校に出向く「出前講義」や「進学説明会」など、高校生に対する大学の充実した情報提供が行われおり、評価できます。

気が付いたところとして、

○学部学生の留学者数が少ないということで、グローバル人材の育成が求められる中で、教員を目指す学生には、もっと積極的に海外で学び視野を広げてほしいと願う。

②学生生活支援では、自己評価はかなり積極的な評価をされています。それに沿って優れているところに○を付けています。

○就職支援体制について、教員採用試験対策講座を実施して、平成21年度から、その回数増加や内容の充実を行うとともに、個別指導を充実させて、教員養成課程の教員志望率が向上、平成21年4月採用教員就職率が全国8位と成果を上げています。また、福祉関連国家試験対策講座も実施、21年度実施の社会福祉国家試験では現役合格84.6%(受験者10名以上の大学で全国5位)と高い評価を上げており、評価できる。

一応これは口頭ですが、教員の就職率非常に高いですけれども、実は大分県の教員にどれだけの方がなられているか。特に現役合格率は後ろの資料を見ていきますと、一桁の前半ぐらいを推移しているという状況です。あえてここには書いていませんけれども、私の

ほうとしては課題ではないかというふうに思っております。

次に大学院のところですけども、教育活動は普通のところに○を付けております。

○10 教育専修が構成され、大学院での研究体制が整っています。

○教授及び准教授の補充率は80%を超えており、「教育研究の高度化と総合化への対応」の取組基盤である人的体制は充実しつつある。

しかし、意見としては、

■教育体制及び研究体制の改革の基盤となるカリキュラムの充実など実質的な教育研究活動体制を強化する取組が求められる。

これは自己評価の分をそのままなぞった感じです。

## ②学生生活支援

○教育・研究施設の改修が21年度に完了するとともに、設備・備品等の更新が行われ、教育・研究の体制が充実をしてきました。

○情報提供が携帯端末からも行えるようになり、常時適切な情報提供ができて、緊急時の危機管理体制も強化されました。この点は評価できます。

■交流協定を活用した海外留学制度を充実させてきたけれども、支援制度が不十分で、派遣実績が向上していない。

3, 社会との連携, 優れているに○を付けております。

○学識経験者として、教員が県主催の委員会等の各種委員, 各種研修会の講師を積極的に務めていただいております。また, 大学・大学院における現職教員・社会人の受け入れ, 高校からの要請による出前講義, 高校生対象の公開講座, 高校生向けチャレンジ講座(遠隔配信)等の実施, さらには, フレンドシップ事業やまなびんぐサポートなどの地域や学校の活性化につながる事業の実施など, 地域への貢献の度合いは高く, 評価できる。以上です。

全体として, 外部評価の対象が16年から21年度の分を24年度にやっていることに違和感がありました。ですから, どうすればいいのかなど。ひょっとして16~21に大学で一生懸命にやっていただいた成果が23年度卒, 24年度卒の卒業生に出てくるからこの時期かなと思ったりもしたのですが, 必ずしもそういう資料があるわけではないので, 16~21の状況でということだと思いますけれども, やはり, ちょっと古くなり過ぎているかなという感じを持ちました。以上です。

## 中国学園大学長 松畑熙一氏

私は、現在は私立大学にいますが国立大学をずっと教育学部を中心に経験をいたしましたし、それから公立大学のほうの評価委員もしたことがございまして、現在私立大学でして、国立・公立・私立の全部の教育を中心にした研究などに努力してまいりました。全体として基本的なところは、すべての人が教育・研究・地域連携という新しい3つの柱をいかに具体的に進めていくことができるかというのが、基本的なすべての教員にとっての課題であると思います。どうしても、例えばあの人は研究はある程度優れているが教育が、あるいは地域連携がほとんどなされていないとか、そういうふうになりやすいので、やはりバランスのある教員、まずは教員自身が教育・研究・地域連携のバランスのとれた努力ということが基本にあって、それから学生なり、教育体制、研究の体制や組織が、どのようになっているかということがいろいろな観点から評価されていくものであらうと思います。やはり、基本は第一に私は3つの柱が一人ひとりにとってどうであるかということの素朴な集大成がまず評価の基本に据えられて、それで、あと具体的にはいろんな問題点がありますので、年度に渡るといようなこともあるし、観点がいろいろありますので、それはその都度課題を認識しながら実践していけばいいわけです。まずはこういう大きな評価、外部評価も含めてのときに、3つの観点からすべての教員が自己反省をし、これからのどのような指針を持っていくのかといことで、特に大きな問題については学部長が指導できるような体制が必要ですね。実は、私は例えば自己評価アンケートでも大きな問題がある先生には学長室に来ていただいております。そして指導をし、そして改善計画を出してもらっています。それに基づいて、それがどのようになっているかさらに点検をしてきちんとするようにしています。やはり、お互いに同僚であるし、そのへんの難しさはありますけれども、やはり評価というのを厳しい中でなされていくという体制が必要ではないかと思えます。そういったことを基本的にはしていただくといいのではないかと思います。

全体的なことを先に申し上げますが、教育福祉科学部という教育と福祉の実践現場というものをきちんと、どうしても学問体系の実践化ということになってしまいやすい学部のカリキュラムにしる、教育指導内容にしる、まず学問が最初にありきということになりやすいので、それは当然研究面は大切ですけれども、教育においては、やはりそのへんも一度忘れて教育現場の問題点をどう吸い上げて自分の学問研究との接点のなかでどのように教育研究を進めていくのかという、そういういわゆる実践力の指導を、学問の実践化というようなトップダウン的なものになり過ぎないようにするにはどうしたらいいか。カリキュラムや教育指導の問題やいろいろあると思いますが、そういう2点を基本的な問題として考えていきたいと思っております。ただ全体としては、私は辛めの評価をする癖がありますけれども、そのなかでは、全体としてはよくやられていると思いましたので、あとは今後の課題ではないかと思う点を少し補足させていただきます。

### ① 教育活動

そこに少し実践的な面とか、3番には一人ひとりの全員参加による適正な自己点検の評価



に基づくということで、先ほどの関連で申し上げたような点もあります。それから教育実習、何か実習的、実践的なものは教育実習やそれにかかわる人が中心になればいいんだというようなイメージになりやすいので、それをすべての先生が教科内容的なことも含めて実践的なものをどのように、教員に求められる資質能力と自分と専門とのつながりのなかで実践に参加するという点ですね。それから入試についても「選抜」から「教育」のパラダイムに重心移行とそこに書きましたが、私はこういう言い方をしています。高校3年生は「大学0年生」であるという言い方をしておりますが、特に高校3年生の後半からはある程度大学の合格が早めに決まったりする。私立大学は早ければ7月、8月に決まるようなこともありますけれども、やはり、教育は高校の段階から高校の先生や高校生が大学と一緒に大学に入って滑り出しよくスタートできるための事前指導がなされていくべきか。そのなかで望ましい学生を育てていって結果的に選抜があるという、そういう方向の中で接続教育としての入試のあり方を検討していくことが、どの大学でもそうですが課題ではないかと思っています。

②学生生活支援の面では、特に私は社会人基礎力というものを非常に重視しています。それが学習力にもつながりがあるわけですが、私たちは社会人として挨拶というものが一番大切です。マナーや規律、挨拶、そういうものを基本にした社会人基礎力をどのように育てていくか。それは部活動を通してなど、もちろん平素の教育を通してなどいろいろするわけですが、そのへんの課題がお互いの問題として具体的にであるでしょう。それから、これは教育活動とのつながりでもあるわけですが、キャリア教育ですね。単なる就職試験としてのキャリア教育ではなくて、社会人基礎力、学習力を育成するべく、将来の自立した社会人として、生涯学習の基本になるようなキャリア教育をどのように進めていくかというのが大きな課題ではないかと思えます。

2、大学院のほうですが、これも「研究」と「実践」との相関ということですね。常に卒論のテーマとか研究修士論文のテーマなども、できるだけ教育実践とのつながりをどこにもたせていくのかという。もちろん学問的な真理探究というのは極めて重要なことであるけれども、やはり、教育福祉科学部としては「教育実践力」とのつながりでの研究というのが教育とどのようにつながっていくのかというのが基本的に大切だろうと思っています。

②学生生活支援のほうは、キャンパス関係その他かなり施設の整備が進んでいるようで、それは非常にいいことだと思います。生活面と言いますか、その施設でどのように活動をさせていくのかという、何か仕込みのようなものが、生活、平素の学習あるいはキャンパスライフそのものの活動をどのようにこの施設の中でやっていくか。例えば学習支援のサポート、ピアサポート的な面などをどのように進めるかということも含めて必要であると思えます。

3、社会との連携は、「地域貢献」とは何かという基本的なことを、大学でやっていることを社会で生かしていくというような、何となく大学中心のトップダウン的な発想が多い。私はあまり「地域貢献」という言葉が好きではないのですが、やはり単に社会に貢献する

ことが大学なのだろうか。私はそれをはるかに超えて地域の中に大学が生き、あるいは大学が中心になって地域を創っていくぐらいの発想が大切ではないかと。私は、すべての学問はある意味で地域創生学でなければいけないという基本的な考え方をもっております。私は基本的に英語教育学を専門にしてきましたけれども、現在は地域創生学を私の専門だと思っているぐらいであります。付け加えになって恐縮ですが、月曜から金曜日まで毎日大学に行っています。土日は「松下村塾」や現在版の「連塾」を主宰しています。21世紀はつながりがキーワードであるという。つながりの連塾という地域のリーダーの養成塾を自分が岡山大学を辞めるときに、すべて退職金その他を費やして「コミュニティ・プラザ連塾」という建物を建て、現在8年目になりますが地域のリーダー養成塾を行っています。やはり大学などの学校教育は前進したけれども地域の教育はどんどん失われているわけでありまして、その学校教育力と地域の教育力がどうつながっていくのかという、それは大学人として、その地域にいる大学人として、ある意味では最大の責任だと思うのですね。単なる地域貢献というようなある意味では大学の甘えをどう乗り越えていくか。一人ひとりがその地域の中でどのように自分たちで地域づくりに関わるのか。地域の中で、自分がやっている教育や研究が反映されていくのかということ。教育実習は教育実習センターでやっています。地域連携は地域連携センターがやっていますというようなそういうレベルの話、もちろんそれも大切ですけれども、一人ひとりがそういう努力をしていくような方向を私は現在も自分で率先してやっているつもりですからちょっと大きなことを申し上げておりますが、少し付け加えさせていただきました。大変長くなって失礼いたしました。

## 宮崎大学教育文化学部長 児玉修氏

宮崎大学教育文化学部の児玉と申します。

(学部について)

- ① 教育活動でございます。総合評価は優れているというふうに評価しております。意見としては〇で5つほど書かせていただきました。すべてこれはプラスの評価を書かせていただいております。

○カリキュラムの構造化を図ろうとしておられる点。

○科目の精選を学校教育課程において行っておられる。これはせざるを得ないと思います。それから人間社会福祉課程では非常に特色あるカリキュラムを編成しておられる。

○GPAを導入しておられる。なかなか難しいですけれども、GPAをかなり有効に活用して仕事をされている点。

○「入学前課題」を提示するとか、入学者の追跡調査をきちんとおやりになっている点。

○とにもかくにも敬意を表すのですが、3種類の全く異なる教育実習を円滑に遂行しておられるという点を私自身は非常に高く評価させていただいております。

あえてということで申し上げたのは、「教育実践演習」について位置付けがございました。大分大学さんは来年度から実施ですね。宮崎大学は去年から実は試行的にやっております。何が困るかと言いますと、学生たちに何をどう自己評価させるかというところで徹底的に迷います。つまり、それは4年生になって急にできることではないと。2年生、3年生、4年生、1年生もあるかもしれませんが、教育実習に行ったときに丹念に自己評価をさせておかないと、4年生になって、さああなたは教員としての資質がありますかと聞いても分からない。何をどう手掛かりにして考えていいかも分からない。手元に資料もない。ということで、私たちも困りまして今年から徹底的に2年生ぐらいから記録を残させて、それぞれ3種類の実習がありますけれども、そのときに自己評価の観点をきちっと記録させまして、そこで何がどう学習したかというのを記録させるように努めております。それがあれば何とか4年生になって、何が足りないのか、私はどうすればいいのかというようなことに気付くことができるということで、そのへんの準備というのは必要ではないかというふうに思っております。

それから、3課程で多様なカリキュラムを組織されていますが、記録を見ますと情報社会文化課程が問題指摘のみがあつてなかなかうまくいってないのかなと思いました。よそさまの課程でこういう言い方をすると失礼かもしれませんが、課題が多くてなかなか解決の見通しがつきにくいと読めてしまいました。

それから、FD活動についても熱心に行っておられますけれども、FD活動を通して私どもがいつも気にしておりますのは、各課程の授業ごとにどういう問題があるのかというのが浮き彫りになっているのかどうか。教員養成系の課程とそれ以外の課程とでは当然カリキュラムの方向性が違うわけですからFDの方向も若干違ってきて当然だと思います。そこで、どんな課程での問題が出てくるのかということをもう少し明らかにされると今後



のカリキュラム開発の指針になるのではないかというふうにも思います。

②学生支援のところでは、普通というところで書かせていただきました。先ほどもコメントがありましたが、教員就職率の向上とか、国家試験の合格率というのはうらやましい限りでございまして、私たちも何とか見習いたいと思っております。ただ、教員就職率につきましてはいろんな評価が可能だと思います。教育長の先生からもコメントがございましたけれども、なかなかある年よかったとしても次の年もいいということでは全くない。それで一喜一憂していいのかという議論が毎年大学の中で繰り返されております。ですから、教員就職率というのをどんな尺度で測るのか。例えば卒業生も含めて今年何名大分大学の教育福祉科学部の方が通ったとか、平均年齢は何歳だったとか、最終的に正式採用される平均年齢というのはどういうふうに推移しているのかというようないろんなデータですね。それらも多元的に評価していかないと、毎年毎年の現役の就職率のみで測っていきますとなかなか長期的な見通しが立たないという問題があるのではないかと思います。これは私ども学部の問題でもありますので、もう少し多元的な評価というが必要ではないかと思いました。

それから、就学支援等につきまして、「学生と教員との意見交換会」は大変ユニークな試みだと思いますけれども、これは学部レベルでぜひ実施されてよいのではないかと思いました。それと「福祉のこころ」というのがかなり特徴的に謳われていますけれども、こういう言い方をすると大変失礼ですけれども、その割には学生に対しての「福祉のこころ」というか、学生の相談体制とかハラスメント等の整備というのはあまりきちんと目に見えるようなかたちでは謳われてないのではないかと思っております。というのは、どこもそうでしょうけれどもこの問題は非常に悩ましいです。ハラスメントが起きると致命傷になり兼ねないことがございます。学生にとってもそうですが我々にとってもそうですので、何とかそのへんの整備を大分大学さんと我々も意見交換しながら何かいい体制ができないのかなというふうに思います。

(大学院について)

大学院のほうですけれども、大変辛口で申し訳ございません。努力が必要というふうに書かせていただきました。

○教育学研究科の性格そのものに由来すると思いますが、もういじりようがない。なかなかカリキュラムをいじろうにもいじれない。研究内容を変えようにもなかなか変えられない。いろんな先生方がいらっしゃるということで、そこで閉塞感というのが漂っているのかなと。つまり、何をどう改革すればいいのかという見通しがなかなか出てきてないのではないかというふうに見えました。ただ、例えば入学定員の確保につきましても、その意見の最後の段にいろいろ書いておりますけれども、教育委員会の方々と連携しながら、修了生の実力判定ですが、修了生はけっこう現場でがんばっているというようなことをアピールしたり、あるいは県教委の方から評価していただいたり、そういう場があったり、あるいはどんなかたちでも交流があったり、公開の懇談会とか、院生との相互の交流とか、

積極的におやりになる必要があるのではないかと。それは私たちの学部ではやり始めておりますので、そういうアイデアもぜひ共有していただけたらと。すみません、大分大学さんにはいろいろネタバラシをしてほかの大学には言わないですが、いろいろアイデアを言わせていただいております。そういう試みがあってもいいのではないかという意見を持ちました。

②学生支援につきましては、これも努力が必要とありますけれども、これは普通に近い努力が必要だというふうにお考えいただきたいと思います。いろいろご努力いただいていることは認識できます。ただ、実際に「教育学研究科の課題」のところにもいろいろ記述がありましたけれども、先ほど申し上げましたようになかなか何をどう改善していいのかという方向性というのが打ち出されていないところに閉塞感というか、不安を少し感じました。部屋等々はいろいろ工夫されて整備されているけれども、実際に先生方のモチベーションというのはどうなっているのだろうかというところが若干不安に感じました。どこの大学でも抱えている同じような問題なのかなという気がいたしました。

(社会との連携について)

最後の社会との連携でございます。これは総合評価で優れていると評価させていただきました。先ほど地域貢献という言い方についての異議もございましたけれども、いろんな活動をなさっているというのは敬意を表したいと思っております。しかも、その効果を検証しようとしてされている姿勢は私たちも見習いたいと思っております。ただ、どこの大学もそうでしょうか、周囲での活動をどのように組織的に統一していくのか。教育福祉科学部さんとしてどういうふうに活動の全体を捉えようとしておられるのか。それと、その活動成果、相手方にとっての成果というのをどういうふうに評価し理解されようとしているのかというようなところを、やはりこれは永久の課題かもしれませんが、私たち教員とか学生にとっての評価というよりも、相手方にとってどうなのか、本当にいいことなのか、地域の本当に役に立っているのかというようなところでの評価というのももう少し必要になってくるのではないかと。当然、組織的にどう統一するかという問題と裏腹の関係ですけれども、そのへんの視点での検討も今後必要になってくるのではないかと考えております。早口でもうしわけありません。以上でございます。

大分大学教育福祉科学部同窓会（豊友会）元会長 現在顧問 古屋虔郎氏

前の同窓会長の古屋虔郎です。

①教育活動ですね。

全体的に教育活動，学生生活支援全部ですね。メモとしてまとめてあるのは大学院にしる，それぞれの会との連携，すべてについて教育福祉科学部はものすごく素晴らしい取り組みをしているということで，全体の皆様方の報告書を読んだうえでのおおまかな結論です。そのうえで，私がこのところはどうかと，私自身が疑問に思った点や，あるいはこのところを私はこう思うというような考え方で書いておりますから，そういう立場でお受け取りいただければありがたいと思っています。

報告書に書いてあるところを順番にいきます。

「1、」理念とか目標が報告書の 29 頁にありますけれども，私はこれは目標が変わるのではなくて方法で手段が変わっていくのではないかという気がして読ませていただきました。

「2、」今後の教員養成，免許制度のあり方について 30 頁にありますが，中教審答申に添って「教職員実践演習」が必修化され，到達目標と評価基準を明示しているのは素晴らしいと受け止めているわけです。

○全体的に素晴らしいということですが，ただ，感覚的に受け止めたのは学部のこの素晴らしい実践的な取組に対して具体的成果を表示していただければありがたいと思ったわけです。報告書の中には，効果を継続的に今後やっていくと書いてありますが，この中に私は明記することがいいのではないかと思います。

それから，今現在大分県が一般市民から教員を 5 名，校長 4 名採用しているんですよ。それがその次の○ですね。

○無免許市民校長，それから教員は書いてありませんが教員が 5 名おります。その採用に対する学部の見解を明確に表明することが必要ではないかというふうに書いてあります。なぜなら，私はこれをしなければ教育福祉科学部の教育は何なのかということが問われることになるかと受け止めたわけでありまして。そこはやはり見解としては明示すべきではなかろうかと考えました。

○次に，とりわけ大分県教育委員会や大分市教育委員会と連携・協同することで地域の教育的課題に対応できるカリキュラムに仕上がっているとしているけれど，実際の連携，協同の内容を具体的に広く発表することが正しいというように思います。もっと県教委，市教委との連携，協同ですね。組織や協議内容等，具体的に表現をしてほしいということでもあります。

「3、」それから，学校教育課題として，「学生から見た問題点」，あるいは「教員から見た問題点」が報告書に述べられておりますが，この解決はどうなったのかなということがないような気がしています。問題点の羅列ではなくて，このように取り組んで解決できなかったものがこれとこれとか，そういう具体的な説明がほしいという気がしたわけです。

②学生生活支援の問題については，学生生活の実態調査報告がずっとありますね。これは

素晴らしいまとめ方だと思います。大変詳細な調査をされて、学生が今何を望み何に興味や関心があるかとか、その他具体的に非常にたくさん例えばタバコを1日に何本吸ったかとか、そういう調査までも本当に詳しく述べられているわけですが、この調査は大変私は素晴らしい調査だと思って見せていただきましたし、これを今後皆様方が大学で教育していく上で「いつ・どこ」でどう取り上げられていくのか課題ではないかと思います。

「1、」特にモラルの点等について就学制度の中でいろいろと具体的な取り組みが述べられておりますが、これも素晴らしい取り組みだと思っています。

○学生と教員の意見交換会は回数に限られるのではなくて必要に応じて何回か持たれることが望ましいのではないかと思います。

○それから、心理的要因で就学困難な学生、さらには経済的問題で就学困難、そういう学生に対する解決状況ですね。特に留学生は円高等で苦勞しているのではなかろうかということをお心配いたしますが、その取組等について具体的にどうなっているかということが述べられるいいなと思いました。

「2、」就職支援ですね。5課題の具体的な推進が説明されておられますが、これの内容等支援されているところ、これは調査の上だった支援ですね。この支援を具体的に進められていることについては非常に素晴らしいと思います。先ほど少しあげましたが、全国の実職率も素晴らしい成果をたくさん上げられているわけです。ただ、問題は一般教員の採用ですね。これについては先ほど児玉先生も書かれておられましたが、現職採用が非常に少ないですね。307人中の27人とか、234名中の11名とか、小学校・中学校もそのくらいの数しかない。これは非常に少ない。とりわけ平成15年の場合は現職からは小学校1名中学校0というような就職状況ですね。これは普通の大学単位を取って教員免許を取って就職試験を受けるということだけではなくて、教育力をつけるための教育を大分大学教育福祉科学部はやっている。その成果はどうなるのかというように考えたのですが、それが先ほどの市民の教員、市民の校長というような問題にも結びついていくのではないかと思います。だから、大学教育の権威はどうなっているのかなと、どうなるのかなということに対する警戒等も述べる必要があるのではないかと思います。

それから、全県下高校から優秀な学生を大分大学教育福祉科学部に集中させる努力を私は関係団体等々に相談をしながら、実は私は、柳井学部長さんがお見えになっておりましたが、同窓会総会の中でも全県下の役員全部にこれを言いました。何とか皆で一緒に大分大学の学生が定数を超えるように持っていかないと、定数以下になるのは問題ですから。今日も実は教職員の全県の叙勲者が全員集まったんです。その会の中で柳井先生が言われました。皆もぜひこの取り組みについて応援してもらいたいということを申し上げました。そういう関係団体と大学と協調体制をつくっていくかという、そのことも大事ではないかとそこに書いております。ということは何となく言いますと、皆さん報告書の中に、大分大学を選んだ理由というのがあります。教育福祉科学部を選んだ理由の中に、まず1番が、自分の学力に合っているからというのが1番ですね。2番目は地元だからということです。

3番目は自分の専攻分野に合っている。4番目が学校の先生や先輩や親、あるいは周りの皆さんからの推薦、紹介、そのことを挙げられています。であれば、私はなおさら先ほど申し上げたようにいろんな関係団体と連絡を取りながら、もっとも優秀な学生を大分大学に集中させるというような取り組みが必要ではないかと書いたわけでありませう。

「2.」大学院は普通ということにいたしました。大学院の環境もまだ新しいのですから、私は具体的に内容的に理解していない面もありますので普通ということにしたわけだ。この教育理念、目標ともに報告書を出していただいた範囲では非常に格調が高い。2年間にわたって30単位ですか、学校教育現場での教育の理論や実践の研究能力や専門性を高める教育に取り組んでいることを高く私は評価いたしたいということです。しかし次の点について説明がほしいと思いました。

①指導者（教員）は一般学部とどう異なるのか。まったく素人ですから素人の考えとしてご理解ください。

②一般教員採用条件はどうなっているのか。卒業して学校現場とかその他にどのような就職状況か。

③現場教職員、一般社会人（無免許校長を含む）の受験入学対応はどうするのかということです。これは学校の一般の先生方から、あるいは全く関係のない社会人からこの大学院は受け入れることができるのかということです。

④文科省の大学院を設定した目標と対応、これは今制度上の問題、課題、予算措置、体制づくり等について私は全く分からなかったらそこに書いたわけだとして、全く素人の書き方です。

⑤学校教育専攻と教科教育専攻の違いはどう違うのか。もちろん、将来の就職状況等を含めてこの違いはどうなっているのかということです。

⑥処遇に対する考え方ですね。具体的に一般大学教職員課程を出たのと大学院を出た皆さんとの資格に伴った処遇といいますか、全体的なものはどう違うのかということです。

②学生生活支援について、これも先ほど申し上げたような理由で普通といたしました。

「1.」就学支援はずっといいことを書いてくださっているわけですが、ただ全体的について①②③と3つありますが説明が少しほしいなという気がいたしました。今後皆さんが希望して受験をするような体制づくりのためにも必要ではないかということです。

①学生の希望意見聴取と制度は必要ないのかということです。（教育、研究、生活、全般）について学生の皆さんの意見。

②奨学制度の検討ですね。大学までは行ったが大学院まではやれない、行けないという状況はどうかということです。

③大学院生の定数はどうなっているのかということです。この報告書の一連の中にはずっとありますけれども、なかなか私自身が把握できませんでしたから、定数はどうなっているのかなということでお聞きしたいと思いました。もちろん、広報活動の中で一般の人が



それを理解するためにどう表現するかということも大事だと思ったわけです。

## 「2、就職支援活動」

①資格は先ほども書きましたが、特別な条件が与えられるのかということですね。学士・修士・博士とかいろいろありますけれども、それがどういうかたちになっていくのかということ。

②大学院独自の就職支援体制づくりの展望はあるのかということですね。大学院を出たらどこに行くのか。下にも書きましたが研究機関とか行政機関とか指導機関、そういうところに就職していくのかなと一般的には思いましたので、そこについてもう少し詳しく述べていただければありがたいと思います。

3、社会との連携ですね。これは、私は評価をしてありません。柳井先生から評価してないじゃないかということをお願いしたのですが、この評価をする中身が私にはないんです。と申しますのは、教育福祉科学部というのは医学部とか工学部のように何か具体的な成果を上げることがあれば、小泉さんのときに商業的成果主義というのがありましたね。あれに対して反論を持っていましたから、だから、そういう考え方で教育福祉科学部を捉えていいのかということ。商業主義的なものではなくて、もっと違う面から少なくとも教育については考えてもらうことが必要ではないかという意味で私は、これは評価する中身がないというふうに考えてつけなかったわけです。しかし、先生方の取組そのものについてはすばらしい取組だと思いますから、もしどうしても書きなさいと言われれば皆様方の取組は、根本的な基本的な考え方を排して考えたときには、私は皆さんの取組はすばらしいと考えているところです。

1、書いてありますように努力の成果は大きなものがあるということですね。

2、附属四校園と公立学校との連携、研究成果の還元と活用の体制、附属四校園の研究体制等の問題、課題、解決の取り組みはどうなっているのかということについて。これは、この報告書を見せていただいて、附属の教師への希望者が今少なくなっているのですね。これはどういうことかなと思います。私は現場にいた関係もありますし、前はものすごくあったんですよ、選考するのに苦労していたぐらい。今は行きたくないと言うんですね。これはちょっと理由が分からないので、この点についてあとでもしお分かりいただければご指導いただきたいと思います。

3、地域貢献と予算計画等ですね。学校運営上、県、市教委との連携強化のために県が唯一の国立大学法人として協議会と、先ほど児玉先生が出されておられましたが、この協議会をやはり私は持つべきではないかと強く思います。唯一の国立法人の大学ですからね。やはりもっともっと大分県の中でも最優先の教育行政としてすべての面での取り組みを求めたいというように考えているところです。

4、広報活動についてですね。

①学部のホームページを見せていただきました。すばらしい内容がありますけれども、これが高校やあるいは同窓会が、先ほど申し上げたような教育関連団体にどう行きわたって

るのかということですね。どのように理解されるために扱われているのかということについてちょっと心配になったところです。県下の優秀な高校生を大分大学教育福祉科学部に集中させる組織的な取組の計画がほしいという気がいたします。

②もう一つは、やはり大学の場合はいろいろ出ておりますしね。だんだん宣伝の対策に打ち込んでおられるようですけれども、もっともっと新聞とかテレビとかそういうチラシとか、そういう具体的な取組をどんどんしていてもいいのではなかろうかと。今はもちろんAPUとか別府大学とかそれと同じような取り組みというのは難しいかもしれませんが、あの取り組みはすごいですよ。同じようにとはいかなけれども、やはりそういうマスコミも使って考えられないかなと思いました。

5, 国立大学法人として平成16年になりましたけれども、このメリット、デメリットを具体的にまだ私たちはよく分かりませんが、どうか思っているところです。予算とか制度的な問題とかいろいろな課題があると思いますが。

6, 高等教育予算はOECD内で最下位ですね。これは皆さんご承知の通りです。しかも、毎年1%ずつ予算削減が行われているという実態のなかで、国立大学法人は88ですかね。全部で一緒に政府に意見具申ができないのかなと思うんです。1校だけではなかなか手を挙げ難いでしょうからね。一緒になって交渉できないのかなと思います。

7, 学校教育課程の決定と大学の教科研究の関わり合いですね。例えば英語を小学校1年から取り入れるとか、今度は剣道、柔道を正科に入れるとか、どんどん打ち出されてきますけれども、現場としては困るんですよ、まったく対応できていないんですから。先生は誰もいないですよ。校長は、しょうがないから、お前やれ、お前やれというようなことで、もし事故が起こったときの責任は誰が取るのかということになりますからね。現場にその体制がないのに、制度としてそれがどんどん持ち込まれてきたのでは、これは学校教育ぶち壊しになりますね。その点はどうなっているのかということです。

8, 委託研究費、共同研究費、寄付金の拡大ですね。この取り組みは各学部ごとですか。学部の先生個人ですかね。組織的なものか、個人的なものか、学部的なものか、そのへんのがちょっと分かり難いですね。大変先生は苦勞なさっていると思うんですよ。金がない、金がないということですね。この点はもう少し明確に言い難いかもしれませんが具体的に出していったいいのではなかろうかと思いました。

9, 日教弘の教育研究助成事業に寄せられる教育実践の論文数の低迷ですね。教員の希望者が少なくなったということ先ほど言いましたが、論文も少なくなりましたね。だんだん論文が、私も教育弘済会の理事長をずっとしてましてね。それで、論文を募集していたんですよ。大体30ぐらいあったのですね。どんどん減ってきてもう今はせいぜい16か19ぐらいですね。現場の先生に聞いたら、まず一番に、そんな研究する暇がない、忙しいと言うんですね。しかし、暇がないと言ってもこれが使命じゃないのあんたたちはと言うけれどもね。実際、現場の中では取り組みだけの時間的、精神的な余裕がないというのが実態ではないかと思います。その点についても、私はやはり何らかの大学としての対応を、

私たちもちろん外部団体として取り組みをしてみたいと思いますが、大学独自の取り組みが必要なのかなという気がしているところです。

10、最後は教員免許単位制と研究意欲、免許制度と専門性等、現場実態と研究機関、教育行政全体的論議が必要ではないだろうか。これは途中に何回か申しあげました課題、問題等と共通している問題です。以上です。